子どもの立場から考える学習基盤づくりのために

～子どもに達成感と充実感を～

確かな学力の向上には、授業づくりや体制づくりとともに学習基盤づくりが不可欠です。「『学び方』『学習訓練・習慣』の確立」、「学習サイクルの確立」、「読書活動の習慣化」の観点から子どもの姿を見つめ直し、発達段階に応じた学習の基盤づくりに家庭と協力しながら取り組み、子どもたちが達成感や充実感を感じることができる教師の働きかけを工夫していきましょう。

最後までがんばってよかった！

達成感！　充実感！

家族で一緒に本を読んだよ！

「学び方」「学習訓練・習慣」の確立

◎　「学び方」が身に付いた子どもの姿とは

□　勉強の約束を守ることができた
- → 宿題に必ず取り組む
- → 授業の準備物を整える
- → 工夫してノートをとる

□　勉強のやり方がわかった
- → がまん強く勉強できる
- → 話をしっかり聴くことができる
- → 自分で調べることができる

勉強ができるようになりたい！

学習サイクルの確立

◎　学びがつながっている子どもの姿とは

□　勉強したことがよくわかった
- → やる気が湧いてきた
- → 自信をもって発表できた
- → 勉強したことを家でも話したい

□　家庭学習が授業で役に立った
- → 先生の質問の意味が分かった
- → 友達にも「すごいね」と言われた
- → 予習したら授業がおもしろくなった

自分はできる！がんばってみよう！

読書活動の習慣化

◎　読書活動が習慣化された子どもの姿とは

□　役に立つから本を読もう
- → 知らなかったことがわかった
- → 朝読書すると集中して授業ができる
- → 心豊かな気持ちを味わえた

□　面白かったからまた読みたい
- → 学校の図書室の居心地がいい
- → 自分で読みたい本を選ぶことができた
- → 気がついたら一冊読み終えていた

読書を通して自分の世界を広げたい！

先生は私のことを見てくれていた！

勉強は将来役に立つ！

一人一人の子どものよさや可能性を最大限に引き出すために

～特別支援教育の視点から～

教師が対応に苦慮する子どもに対しては、育ちを見守りつつ、子どものよさや可能性を引き出すために、支援を変えていく必要があります。そのことが自己肯定感を高めることになります。さらに、周囲の子どもにとっても効果的な支援になります。

◎　子どもの周囲の環境を考えましょう

環境に影響されやすい子どもがいます。

□　教室の正面（黒板）は整理し、必要なものは教室の側面などに掲示します。

□　座席の位置を工夫します。後ろが気になる子どもにとっては、一番前の席は必ずしもよいわけではありません。

□　教師の視線、しぐさ、声の大きさやトーンなども、環境の要因の一つです。

△　掲示物や周囲の音などが気になり、授業に集中することが苦手な子どもは、その都度繰り返し注意されるため、劣等感を生み出す可能性があります。

◎　子どもの苦手さを理解しましょう

わかっていても実行できない子どもがいます。

□　話すことが苦手な場合には、必要に応じて選択肢を示すなどの支援をします。

□　読むことが苦手な場合には、教科書などの文字を拡大したり、行間をあけたり、読む量を調整したりします。

□　書くことが苦手な場合には、重要語句を枠で囲むなど板書を工夫し、ノートのどこに何を書くかのルールを指導します。

△　わかっていてもうまく行動に移せない子どもは、満足感や達成感を得た経験が乏しく、自分に自信がもてなくなり、学習意欲が低下してしまう可能性があります。

自己肯定感！

◎　子どもへの指示の仕方を考えましょう

指示や説明を聞くことが苦手な子どもがいます。

□　指示をする前に「大事なことを一度だけ言います。」と注意を引きつけます。

□　子どもが集中したことを確認してから、指示は短く、簡潔に伝えるようにします。

□　指示内容は視覚的に提示し、予定・スケジュールの変更はなるべく避けます。

△　聞くことが苦手な子どもは、常に教師から繰り返し注意されることが多くなります。そのため自己評価が下がり、集団への参加を拒否することに発展する可能性があります。

◎　子どもを褒めたり認めたりする方法を考えましょう

褒められる経験がとても少ない子どもがいます。

□　子どもの得意なこと、興味・関心があることに注目し、周囲の子どもたちと同じことができたときにも褒めます。

□　係活動や手伝いなどの場面を設け、役割を果たしたときに褒めます。

□　直接褒めることに加えて、他の教師を通して間接的に褒めたり認めたりします。

△　褒められる経験が少ない子どもは　劣等感を生み出し、自己評価も下がることから、学級への所属感も育ちにくくなる可能性があります。